

# 「レオナルドの眼」と二つの視点

## —ボローニャ大学での創立者の講演に学ぶ—

富田 邦昭

### はじめに

創立者は、ヨーロッパ最古の大学であり、母なる大学とも称され、ダンテ、ガリレオ、コペルニクス等も学んだイタリア、ボローニャ大学から名誉博士号を授与された。そして1994年6月1日ボローニャ大学において、「レオナルドの眼と人類の議会国連の未来についての考察<sup>1</sup>」と題して記念の講演をされた。

私がボローニャ大学の講演を真剣に学んだのは、講演から9年後のことであり当時は闘病生活のなかにあった。冠攣縮（心臓の冠動脈の痙攣）から心筋梗塞となり、意識不明に陥った。幸いにして意識を回復するが、検査の結果判明した病名は、『特発性拡張型（うっ血型）心筋症（国の認定難病）』であった。長期の闘病生活を余儀なくされた私は、苦悩の中で創立者の哲学を求め、『海外諸大学講演集・21世紀文明と大乘仏教<sup>2</sup>』に記載された講演に出会った。

創立者のレオナルド・ダ・ヴィンチ観に感化された私は、レオナルド・ダ・ヴィンチ（以降レオナルドと呼称する）について学んだ。レオナルドは約600枚のデッサンと8000紙葉（残存する紙葉は4000とも5000とも文献により相違している）もの手稿と呼ばれるメモを残しており、その内容は絵画論、解剖学、土木工学、都市工学をはじめとして多岐にわたっている。それらはレオナルド自らが、将来の出版のために準備したものである<sup>3</sup>。レオナルド自身も勤勉な勉強家であり、読書家であった。当時大変高価な蔵書<sup>4</sup>を多数所有していたと記録されている。

創立者は講演において、世界平和を念頭におかれて、人類の課題である国連の活性化へ向けての改革を提議され、同時にその問題解決への道を呈された。その原動力にミクロの改革をおき、マクロ（国連）の改革へと向かう壮大な内容であり、仏教的知見を源としていた。創立者はミクロの改革に光をあてるため、レオナルドに焦点を当て論及された。

創立者のレオナルド論を何度も読み学んだ。レオナルド論の二つの視点は、

当時闘病中だった私が蘇生する活力となり、闘病生活の精神的支柱となっていたのである。(発病から4年後の2009年4月1日、創価大学通信教育部に入学)

創立者の講演は、深遠な仏教的知見と、膨大な知識の集積からなされたものである。したがって私のような浅学では、小論を起稿するにあたり、創立者のレオナルドに対する人物観を、創立者のレオナルド論として論及するには力不足である。それでも闘病中に実体験として学んだ創立者のレオナルド論も論拠にしながら、創立者の「レオナルドの眼」にある「自己を統御する意志」と「間断なき飛翔」の二つの視点に焦点を当て、創立者のレオナルド論にアプローチした。

## 1. 「自己を統御する意志」のプロセスとレオナルドの生い立ちを考察する。

創立者のレオナルド論を学ぶにあたって、文献からレオナルドの生い立ちと少年期を学ぶ。レオナルドの父はセル・ピエーロといい、五代続く公証人と記述されている。その仕事の役目から記録することには慣れているはずだが、父のセル・ピエーロ自身によるレオナルドの記録はない。文献にも唯一論証できるものは、課税台帳<sup>5</sup>しかないと言われている。無尽蔵のレオナルド関係の文献が存在するが、あきれるほど断定的に記述されているのが大半である。レオナルドが、実母カテリーナと何歳まで過ごしたのかも判明していない。分かっているのは母のカテリーナと父のピエーロとは正式な結婚をしていないということである。カテリーナはヴィンチ町または隣接地域の娘であったことが判明している。1457年の課税台帳の記録によれば、カテリーナは、その後ヴィンチ町のアッカッタブリーガ・ディ・ピエーロなる者と結婚している。一方のレオナルドの記録は、祖父アントニオの1457年の納税報告書の記録があるが、彼の名前はなく、「五歳の同居人」として記され「非嫡出子<sup>6</sup>」と明記してあるだけだ。その記録から換算すると、レオナルドは最長5歳まで母親のカテリーナと過ごした可能性がある。

文献<sup>7</sup>をみると、当時の私生児に対する社会観は、財産が豊富にあり、多くの子供を養えた状況ではいわゆる私生児は珍しくないと記され、その子にとって不都合が生じることは少なかったと記されている。また、私生児として生ま

れたことへの悲壮感もない。だが、果たしてそうであったか、経済的にはそうであっても、人間関係の上ではわからない。まして文献には幼少期の記録も、伝承以外に正確な記録がない以上、この点に関しても推測の域を脱していない。

次に多くの文献に記載されていることではあるが、レオナルドがラテン語を十分に読みこなせなかったことに注目したい。勿論、直接の原因は、レオナルドが公用語のラテン語を学ばなかったからだが、その原因が、レオナルド自身の意志によるものなのか、父のセル・ピエロの教育方針だったのか判明していない。しかし進路は決定した。当時はラテン語をマスターしなければ公職にはつけないのである。進学コースのみがラテン語を学び、就職コースではマスターできない。レオナルドはヴィンチ村での初等教育を受けた後に、就職コースである算数学校に進学したのだった。

レオナルドは後にラテン語の読み書きができないことから、自分自身のことを「無学の人<sup>8</sup>」と呼んでいるが、何故天才レオナルドが、進学コースを選ばず、他のヴィンチ家の子孫とは違う職業の道を選んだのか、それとも選ばされたのか、その点は大いに興味のある点である。その理由を文献に求めたがまだ出ていない。一般的に考えてもこの選択は、人生の岐路であろう。しかし、「無学の人」レオナルドの真実は、学問をすることを決して嫌っていたわけではない。先ほどの『マドリッド手稿』によると、蔵書の中に、ラテン語の初期文法書や、商人の子供たちが少年期に習うそろばんの教科書なども含まれていた<sup>9</sup>と記されているが、この点を論拠におくと、レオナルドは独学の人であり、創立者が「孤高の世界市民」と呼ばれた所以がここにあるのかも知れない。

ある時期に、レオナルドはヴィンチ村からフィレンツェへ転居する。レオナルド少年が何歳の時なのか、その理由はなんであったのか、文献を探してみたが書かれている情報は推測の域を脱していない。レオナルドのフィレンツェ時代の様子を記した手稿がある。『アランデル手稿<sup>10</sup>』である。その中にフィレンツェ近郊の山々を、ひとりで探索したときの経験が記されていた。興味深いその部分を引用すると、「張り出した岩の間をかなりの距離歩き回った私は、巨大な洞穴の入口にたどり着いた。＜中略＞しばらくその場にいと、突然、私のなかで二つの感情が呼び醒まされた—恐怖と欲望だ—不気味なくらい洞穴への恐怖と、中になにか驚くべきものがないか見てみたいという欲望だった<sup>11</sup>」と記されている。この事象を医学博士でもあり、レオナルドの研究者でもあるシャーウィン博士は、「この短い記述には、考えることが多い」と記し、この手稿に関する論点を述べている。要点をまとめると、レオナルドは恐怖と

欲望の両極が並はずれて巨大であったこと、そのことが将来おこなった解剖学研究に影響を与えたと論及していることである<sup>12</sup>。解剖学研究のことは後に論及するとして、シャーウィン博士は、両極が並はずれて巨大だったとする資質の誕生や、レオナルドの人格形成には、ある一部の出来事の分析以外は、あまり詳しくふれていない。論拠となる記録がすくないからであろうか。ただ、この洞穴での発見は、当時の教会が教えている既成概念を打ち砕く重要な発見であったと博士は記している<sup>13</sup>。

創立者が示されたレオナルド観のひとつに、「独立不羈の自由人<sup>14</sup>」、「人間社会のしがらみにも束縛されぬ、孤高の世界市民<sup>15</sup>」という人物観が示されている。創立者の人物観は『私の人間学<sup>16</sup>』に著されたように、人間の本質に焦点を当てられている。ゆえに、創立者にならって、シャーウィン博士の角度とは別の角度から、レオナルドの少年期を論及してみた。レオナルドは少年期の進路選択の結果、自由な時間を手に入れることができた。レオナルドは机の上で、既成の学問と、既成の概念を学ぶことに、貴重な時間を費やすことなく、一人で長時間にわたり、自然を師として、自然を友として、大自然の中で思う存分に真理の探究を、またその発見に歩き回った。写真家としても著名な、創立者の写真集のタイトルから表現するならば「自然との対話」である。その自然を観察する中で自分自身を小宇宙、自然を大宇宙として学んでいった。このことは、創立者の言葉が示すように、レオナルドは「独立不羈の自由人」、そして「孤高の世界市民」の資質を開花させていく要因となったと考察する。二番目はフィレンツェ近郊の山々を、一人で危険を顧みず自由に散策できたのも、両親（実母と離別後、義母と住む）がレオナルドに、あまりうるさくいわなかったからだと思っている。この点には広義の意味で人間の本質論、教育論が見え隠れしているように思う。いずれにしても、レオナルドを取り巻く環境がレオナルドの人生観に大いに影響を与えたのは事実である。

この『アランデル手稿』に記述されたことは、創立者のレオナルド論の論拠となる出来事だと考える。ここでもう一度、洞穴を前にしての、レオナルドの心理描写に注目したい。レオナルドはその時々湧きおこる自分自身のこころの様子や感情を、冷静に観察し克明にノートに記している。具体的には、恐怖と欲望（憧憬と訳している文献もある）が、どこから突然湧いてくるのか、自分自身のこころを観察し、自分の内面の恐怖をコントロールしようとした。ここで使用されている欲望や憧憬と訳された言葉であるが、一般的に使われる野獣的な欲望、ある種の憧憬的なものを指すものではなく、真理を求める探究心

であり、人間を知ろうとする求道心的な強い興味ではないだろうか。そしてレオナルドは突然湧いてくる二つの感情が、何も無い心からなぜ湧いてくる（有）のかを不思議に感じたが、恐怖心を律しなければ洞穴には入れない。そこで未知への探求心、自然の真理を求める求道心（欲望・憧憬）を原動力として、恐怖を乗り越える強い意志をもつことができれば、自分が欲望する真実の心理を確かめることが可能であることを体験として掴んだ。レオナルドはこのような経験を何度もするうちに、創立者が指摘する「自己を統御する意志」をより強固に、より深く、もったのである。

ここで創立者が自分自身を知ることについて論及した文を引用したい。「あらゆる修業、あらゆる学問の究極は、自分自身を知ることには帰するといっても過言ではない<sup>17)</sup>」。

創立者が示唆した学問の究極を、レオナルドは少年期から自然を師として学んでいくのである。

レオナルドが、自己を統御して得たものは何であったか、シャーウィン博士のいう洞穴での発見とは何を意味するのか、その答えは具体的には記されていない。しかし博士が指摘するように、レオナルドはこの発見からも既成の先入観（教会が絶対と教える知識）を打ち破る発見をしたのである。そのことは全く新しい概念を育て、より強く「自己を統御する意志」の必要性を感じ、それが正しいことだと確信したと考察する。この点の論拠をもう少し文献に求めてみたい、「レスター手稿22裏<sup>18)</sup>」には「アルノ河の砂州」で実際に起こった竜巻を観察した様子が記述され、二年後の「パリ手稿F37裏<sup>19)</sup>」にも同じく竜巻の様子が記されている。レオナルドは竜巻を、「猛烈な大気の運動」という言葉で表現した。そして、この観察事実から、自然が、地球が、そして宇宙が運動するということの概念を発見し、地球が運動する生命体であると確信するのである。

レオナルドは捉えた、宇宙には自然を創造する人間の知力では計り知れないエネルギーがあること。そのエネルギーと人間は何らかの関係を持つこと。つまり、地球の誕生そして破壊、そこには地球の生命、宇宙の生命が主体となっていること。そして、そこには人間の生命と一体としてつながる何かがあるように、気づいたと考察する。ここには、レオナルドの生命観、宇宙観があるように思う。

次に哲学者古田光氏のレオナルド論を考察してみる。古田氏は著作の中で「レオナルドにとって、自然は限りなく魅惑的であると同時に、底知れぬ神秘的な

ものであった。その神秘を探り、その秘密を奪い取ることによって、＜中略＞魔術師的な魂をもった科学者として、自然の創造と変化の秘密を探り続けたのである」と述べている。古田氏はレオナルドが恐怖心を律し、自然の神秘を探る欲望が巨大であることを、魔術師的な魂をもった科学者と表現し、自然の真理を解明することを、「秘密を奪いとる」と表現している。ここに哲学者古田光氏のレオナルド論が定義されているように思う。医学博士と哲学博士とでは視点と表現は大きく違っている。

いっぽう、創立者のレオナルド論は「自己を統御する意志」という明確な言葉で表現されている。それは厳しい環境や苦難に面しても、自身に湧いてくる恐怖心や不安などの心を克服し、自分自身を自由自在に前進させることができる、強靱な意志を持った巨人、強いレオナルドの人間像を表わしている。創立者はレオナルド論を展開しながら、現代に人間力の増強を訴え、ミクロの改革の重要性を指摘すると同時に、人間の持つ可能性にも焦点を当てているように考える。創立者はレオナルドの生涯が、この意志の改革の道であったと指摘し、「レオナルドにおける自己を統御する意志は、私どもの『人間革命』と深く通じていると私は信じております」と主張された。

創立者は法華經の「令離諸著」の知見をひかれた。レオナルドの生き方が、人間の根源的欲望から発する執着を冷静に捉えたうえで、その執着するものを分析し明確にしたうえで、生き抜くための強い人間の確立を目指した、と創立者のレオナルド論を展開されている。そのうえで創立者は、レオナルドの生き方は、仏教の「出世間」の意義に近い生き方であると論及された。この点は真理を探究する欲望ではなく、人間の獣性からくる根源的な欲望をレオナルドは自由自在にコントロールできることを示唆している。ここには創立者が提唱するコスモポリタン（世界市民）へのプロセスを述べられていると考える。

創立者のレオナルド論「自己を統御する意志」という視点は、私にとって蘇生への視点であった。心臓の三分の一が壊死したことから湧いてくる死への不安、難病という言葉が与える落胆と失望、そして厭世感、無理を承知で現実を守ろうとする執着心、それらをすべて伏せていった。そして先決問題として、第一義に生き抜くことに専念したのである。

## 2. 「間断なき飛翔」と師弟

レオナルドは、その才能を認められてヴェッロッキオの工房へ入門した。ただ何歳の時かは確定されていない。研究者によってまちまちであり、14歳<sup>20</sup>と断定しているものもあれば、15～18歳と書かれたものもある。レオナルドはヴェッロッキオ（「真の眼」）と呼ばれた師匠アンドレーア・ディ・チョーネに弟子入りをした。

当時のフィレンツェは商家の支配者メディチ家が栄華を誇っており、ヴェッロッキオの工房のお得意様であった。その仕事は彫刻や絵画の類ばかりでなく、祝祭日の行事のプランを作り、そのためのさまざまな見世物を作ったと記されている。師匠のヴェッロッキオも、宗教用や装飾用の金属工芸の設計家および工芸家として大変な売れっ子であり、さらに楽器の制作者でもあった。レオナルドを含めた弟子たちも、銀、大理石、ブロンズ、木による作品制作を任され、ヘルメットや鐘や大砲も作ったと記録されている。

以下の文献<sup>21</sup>の抜粋から当時のレオナルドの様子が理解できる。レオナルドは工房に徒弟として入り修業をしている。ヴェッロッキオを師匠として通算十数年の間、この工房で仕事をしているが若くしてマエストロになりながら独立工房は持っていない。この当時は、絵画や彫刻の仕事を志す者は、まず名高い師匠を選び、その工房に入って徒弟修業をするのがふつうであった。ギルドと呼ばれた同業組合に、登録された親方が工房を開き、弟子を雇い、注文を請け負って作品を制作する。そこで弟子は、師匠の仕事を手伝いながらさまざまな技法を経験的に身につけるのである。レオナルドもマエストロ（師匠）になる20歳まで、このような職人教育を受けた。そして師匠の技法を、経験を積みながら習得していった。その後も9年間師匠のもとで仕事をしている。

当時は、メディチ家からの多種多様の注文が多く、工房の仕事は多能性が要求されたとされている。当然師匠ヴェッロッキオは多能な人であり、レオナルドもまた弟子として、それに応じて多種多様な技法を取得していったと考察する。レオナルドが万能の天才といわれる所以はここにあるのかもしれない。師匠ヴェッロッキオの特筆すべきことは、絵画や彫刻の技法を進化させるために、数学や解剖学を熱心に研究し、遠近法や明暗法を芸術表現の新しい手法として取り入れようとしたことである。

解剖のことは、前項に、シャーウィン博士が『アランデル手稿』にある洞穴探検の心理描写を捉えて、レオナルドは少年期から、解剖に必要とする適性を

養っていたとの主張を記したが、解剖のきっかけを作ったのは師匠ヴェロッキオだった。ただ、師匠ヴェロッキオは「弟子に表面の筋肉組織の研究が重要だと強調していた<sup>22</sup>」と伝えられるように、ヴェロッキオの解剖はあくまでも表層の筋肉の部分だけに限っていたと記している。レオナルドもまた、師匠の教えに従ってヴェロッキオの解剖に立ち会い、そして学んだ。レオナルドは絵画における解剖の必要性もウィンザー紙葉<sup>23</sup>に「裸体の人々の姿勢や、身振りを上手に描くためには、画家は腱や骨や筋肉の解剖を知ることが必要である」として絵画の技術習得のためには解剖が必要であると記している。

レオナルドの絵画論は、「絵画こそが学問であり、自然の正当な申し子<sup>24</sup>」だとするものであった。レオナルドは自然界の植物も小動物もありとあらゆるものを解剖している。そしてその仕組み、エネルギーの伝達方法、自然界との関係等を調べデッサンに遺している。レオナルドは特に興味を持った部分、例えば手や腕、そして心臓、眼などは何枚もデッサンを重ねた。最初は師匠ヴェロッキオの解剖を見たり手伝ったりしながら、デッサンを重ねて行くのであるが、レオナルドが主体で解剖を始めたのは医学のためであり、表層を超えて解剖をしたのはレオナルドが初めてであるとの内容をシャーウィン博士は記している。その点について20世紀の初めのころに、ノルウェーの医学史家H・ホプストックの研究論文にレオナルドの解剖学上の偉業をまとめている。その論文<sup>25</sup>からもレオナルドが医学史上類を見ない功績があることが理解できる。

ではどの時点で絵画のための解剖から医学のための解剖へと移行したのだろうか。その答えとなる記述がある。「彼が自らの手で解剖をおこなったことが確認できるのは1505年ごろである。＜中略＞そこにはすでに絵画のための解剖学を離れて純粹に科学としての解剖学を追求しようとする志向がしめされている<sup>26</sup>」とある通り、レオナルドは、解剖学として内臓の様子も筋肉のありようも全てデッサンで示している。その人体図は今も精密で優れた学術書として光を放っているとシャーウィン博士は述べている。レオナルドは解剖において、自分自身の眼で見た真実を、先入観なしに表現しようとしただけでなく、周りのどの角度から見ても観察できるように、どの器官についても、四方からみた四つの描写をする方法を考え出した。そして骨の場合はその方法に加えて、真ん中を切って骨の空洞の部分も描いたのである<sup>27</sup>。つまり、レオナルドが死んだ人間を描くと、骨も死んだように描かれ、その骨の表面からも中に空洞があるようなイメージに描かれた（デッサンされた）と評価されている。創立者が指摘する「不可視の可視化」である。



創立者はレオナルドが言葉ではなく絵画（デッサン）を多用して表現したことをレオナルド論においての重要な位置に捉えている。そのことについて、「レオナルドは現実を固定化してしまいがちな言語の働きには、不信と敵意すら抱いていた<sup>28</sup>」と指摘した。創立者が指摘したことは、言葉の表現では刻々と変化するところの様相や、とめどもなく湧き出る感情の変化を一瞬にして表現することは不向きであり、言葉がもつ欠点であるとのレオナルド的言語観を述べられているように解釈する。

一方絵画について、レオナルドの手稿<sup>29</sup>を論拠にすると、絵画とは言語が持つ欠点、不向きな部分を、どう表現するか努力し苦悩することにより、表現方法を苦闘の末発明することが絵画である、とレオナルドは指摘しているように思える。また先ほどの手稿の中で、「絵画こそまさに学問であり」と主張したのはそのような意味であると考ええる。レオナルドが、死体の眼を解剖し、物がどのようにして映るのか、眼のシステムを解析<sup>30</sup>し、絵画の遠近法を実体的にまた数学を駆使しながらマスターを目指した、という事実により、私は圧倒される。「哲学的思索をめぐる細やかな発明の作業」であると結論付けたレオナルドにとって、より優れた絵画法のためにはあらゆる方法を駆使し、取り組んだのである。以上論及したように、レオナルドの絵画への姿勢から、創立者のレオナルド論「間断なき飛翔」の論拠を学ぶことができる。

また、創立者が間断なきと表現され、レオナルドの永遠性、もしくは連続性を、指摘された論拠の一つとして、作品が完成しても自身が理想とする絵画法全体からみれば未完成だと考え、努力精進を重ねた点ではないだろうか。そのレオナルドの哲学を創立者は言葉をかえて「完成の未完成」と表現された。レオナルドには固定概念の完成というものはない。晩年の人生<sup>31</sup>においても、作品が完成し名声を得ても、レオナルドは安住することはなかった。常に新しい絵画法を編み出そうと、そこからスタートしたのである。晩年転々と移動する中で、未完成として3点の絵画を持ち続けた意味も、そこにあるのかもしれない。創立者の「間断なき飛翔」とは永遠に連続する飛翔である。レオナルドが死体を前に、恐怖心と腐臭と、そして倫理にさいなまれながら、約30体の人体を解剖し、201枚の「解剖手稿」と、779枚の解剖図を残した、その意義は後世の人類のためであったと考察する。その原動力は「間断なき飛翔」であった。

創立者はその原動力となったレオナルドの哲学を、仏教の知見から竜樹菩薩<sup>32</sup>と比較して捉え、レオナルドを論及された<sup>33</sup>。『仏教哲学大辞典』を参考に竜樹菩薩を要約して解釈すると、竜樹は「空<sup>34</sup>」の理念を根本思想として真理

を民衆に教えた。そしてそれまで浸透していた小乗の因縁や戒律に執着しても、なんら仏の本性に親近することにはならないとして、小乗の固定観念から民衆を解放したのである。

ここでレオナルドの「無」について述べた「アトランティコ手稿<sup>35</sup>」を考察する。「この世にある壮大なものの中で、『無』の存在が最も大きい。『無』は時の中に存在し、過去や未来に四肢を伸ばしている。この四肢によって、自然であれ、動物であれ、過去の出来事や未来に起こることの全てを支配するが分割不可能な現在に関しては何も支配しない。『無』は、いかなるものの本質の上にも存在しない」。ここに記述されたレオナルドの「無」の概念は、中世ヨーロッパの有無の哲学とは違っていると考察する。「『無』は時の中に存在し、過去や未来に四肢を伸ばしている」とのレオナルドの「四肢の概念」などは、創立者が指摘した「空」の思想そして相互依存（縁起）に親近していると考えられるものである。そしてレオナルドはこの「四肢の概念」を絵画に描き続けたと考える。例えば、花のつぼみを描くのに、花が満開に咲いた時を連想し、つぼみを描いたのではないだろうか。絵画の中にもう一つの自然を描いたのである。

創立者はレオナルドの言語批判の真意にあるものが、「竜樹菩薩の洞察を想起させる<sup>36</sup>」と指摘された。創立者は二人の類似点を明確にし、論及されている。二人の類似点とは、言葉の持つ「固定化」を嫌った点である。講演では次のように論及された。「言葉による固定化が＜中略＞怠惰な精神の格好の温床となるであろう、と警鐘をならしているようであります」と、そしてまた、「『性急は愚かさの母である』＜中略＞急進主義は禁物であります<sup>37</sup>」との二点である。創立者が最初に述べられた点、二人が言語による固定化がもたらす弊害を示唆し、警鐘を鳴らした、とする点については、このように解釈する。レオナルドは人間を含めて自然のすべてが固定されるのではなく、常に変化するという事実を体験から得て、その思想を哲学として根底においていたことが理解できる。この真理は仏教の「無常<sup>38</sup>」という概念そのものであり、それはまた竜樹の思想でもあった。竜樹は、天台、釈尊と三祖一体とする知見があり、この点も創立者は指摘されていると考える。そしてレオナルドは、常に変化するなかで、普遍的なものを、絵画の中に表現し続けたと考えている。

次に創立者は、大乘仏教の精髓を紹介しながら、言葉が安易に描き出す理想や可能性を人間が錯覚し、信頼し、性急さを競うことを急進主義の危険性として警告した。この点についてレオナルドが、一枚の絵画を描くために、身振りを上手に表現しようとして、腱や骨や筋肉の解剖をしてまで取り組んだ姿勢に、

急進性よりも、現実性、確實性、真実性を、重要視し、その問題に取り組む姿勢をレオナルドの人生観を教訓として捉え、警告されていると考える。レオナルドの人生は、「レオナルドの眼」は、まさに仏教に親近する哲学であると考ええる。

以上論及した点から、創立者のレオナルド論の「間断なき飛翔」とは、その人の環境を乗り越え、人間の持つ本源的な問題を解決しゆく力であり、それは心にある。そして、その強い力は全ての自然界に、人間の内面に、無でもなく常に有でもなく存在し、強固な意思によって自由自在に湧いてくる力である。そのことを、レオナルドは、悟っていた、と論及されている。

## おわりに

創立者の本講演を学び始めてから、6年の歳月が経つ、昨年は持病の「特発性（うっ血型）拡張型心筋症」に加えて「バセドー氏病」、そして「胃癌」と連続して発病したが、創立者のレオナルド論を指針にこれを乗り越えた。その勢いで小論に取り組んだが、力不足から多くの課題を残した。今後の取り組みの課題としたい。

創立者の「レオナルドの眼」についても今までに論及してきたが、「眼」について、創立者が仏法者として、過去にその知見を述べられていることを論拠のひとつとしたい。創立者は「眼の功德といっても、必ずしも、肉眼についてののみいうことではない。正しい人生観、社会観をもち、幸福への人生をあやまちなく進んでいくことが眼の功德である<sup>39)</sup>」と講義されている。よって、「レオナルドの眼」とはレオナルドの人生観、社会観であると同時に、「自己を統御する意志」と「間断なき飛翔」を持つ人達の眼でもあると考えている。

創立者のレオナルド論は、「自己を統御する意志」という重厚で強固な「静」のエネルギーと、「間断なき飛翔」という宇宙的なダイナミックな「動」のエネルギーで構成され、レオナルドは、その二つを内面に兼ね備えた、強い人間力を持つ人であった。そして宇宙の真理を掴もうと人間の内面を観察し探求する「レオナルドの眼」であった。

一方、レオナルドとプロセスは違えども、創立者もまた、「人間革命」運動を指導され、「自己を統御する意志」と「間断なき飛翔」を現代に実践されてきた指導者である。その創立者がマクロ革命を勝利に導く鍵は、レオナルド論

が示す、強靱な人間力を持つコスモポリタン（世界市民）の輩出だと結論付けたのである。つまり、創立者も、世界も、「レオナルドの眼」を持つコスモポリタン（世界市民）を待望されている。そして創立者は講演の最後に次のように述べられている。「私も仏法者の立場から、レオナルドの遺産を継承しつつ、皆様方とともに、その人類史の新たな夜明けに向けて、走り抜いていく決意であります」と。

小論の最後にレオナルドの言葉を引用したい。

「読者よ 私をひもといておくれ それがそなたに喜びをもたらすならば  
なぜなら 私のようなものはめったに生まれはしないから なぜなら この仕事に必要な忍耐力をもつ人は少なく 同じような仕事を新たに行おうと望む人も  
ごくわずかだから 人々よ 見に来ておくれ この研究によって 自然の中に発見される奇蹟を 確かめに来ておくれ<sup>40</sup>」

〔注〕

- 1 池田大作『21世紀文明と大乘仏教』—海外諸大学講演集—（聖教新聞社、1996年、PP.144～159）以下「池田①」とする
- 2 池田①P.144
- 3 シャーウィン・B・ヌーランド『レオナルド・ダ・ヴィンチ』（訳菱川英一）（岩波書店、2003年、PP.134～135）
- 4 池上英洋監修『ダ・ヴィンチ全作品・全解剖』（阪急コミュニケーションズ、2009年、P.97）
- 5 ヌーランド前掲書P.14
- 6 ヌーランド前掲書P.14
- 7 アレックサンドラ・フレゴレント『万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチ』（ランダムハウス講談社、2007年、P.10）
- 8 ヌーランド前掲書P.22
- 9 池上前掲書P.67
- 10 ヌーランド前掲書PP.24～25
- 11 ヌーランド前掲書PP.25～26
- 12 ヌーランド前掲書PP.26～27
- 13 ヌーランド前掲書P.25
- 14 池田①P.149

- 15 池田①P.149
- 16 池田大作『私の人間学』（読売新聞社、1988年）
- 17 池田大作『御義口伝講義下』（宗教法人創価学会、1973年、P.981）
- 18 古田光『レオナルド・ダ・ヴィンチ人と思想』（星雲社、2008年、PP.40～41）
- 19 古田前掲書PP.40～41
- 20 古田前掲書P.48
- 21 古田前掲書PP.49～66
- 22 ヌーランド前掲書P.27
- 23 フレゴレント前掲書P.59
- 24 フレゴレント前掲書P.18
- 25 ヌーランド前掲書PP.166～167
- 26 古田前掲書P.143
- 27 ヌーランド前掲書PP.46～47
- 28 池田①P.156
- 29 フレゴレント前掲書P.18
- 30 ヌーランド前掲書P.136
- 31 古田前掲書P.163～
- 32 創価学会教学部編『新版 仏教哲学大辞典』（聖教新聞社、1985年、P.1870）
- 33 池田①P.156
- 34 創価学会教学部前掲書P.344
- 35 フレゴレント前掲書P.128
- 36 池田①P.156
- 37 池田①P.156
- 38 創価学会教学部前掲書P.1752
- 39 池田大作、前掲『御義口伝講義下』 P.317
- 40 フレゴレント前掲書P.51